

源氏物語における玉鬘の造型について

——『原中最秘抄』が示す長谷観音の靈驗譚の関わり——

今 井 友 子

はじめに

十二世紀末に編纂された今様の歌謡集『梁塵秘抄』に、「観音験しんごんを見する寺み、清水石山長谷きよみづいじやまはせの御山をやま、粉河近江こながはわかみなる彦根山ひこねやま、間近く見ゆるは六角堂ろくかくどう」と謡うように、奈良時代の創建以来、長谷寺の名を世の中に知らしめてきた。この長谷観音の靈驗を明確に想起させるかたちで書いたと思われる源氏物語の巻に、玉鬘の巻をあげることができた。この巻に登場する夕顔の忘れ形見の姫君は、後世の読者により玉鬘と呼ばれる。母夕顔と死別の後、乳母と共に筑紫に下り、その地で成人すると、豪族の強引な求婚を逃れて上京する。玉鬘は都に無事帰着した報告に石清水八幡宮を詣でると、その次に、

仏の御なかには、初瀬^{はつせ}なむ、日の本のうちには、あらたなる験^{しるし}あらはしたまふと、唐土^{ちゆうこし}にだに聞こえあんなり。

(玉鬘・二九七)⁽²⁾

という乳母子豊後介の勧めで、初瀬に向かう。椿市の宿に着くと、折りしもそこに来合わせたのは、十数年にわたり夕顔の忘れ形見を捜していた夕顔の乳母子右近であった。右近との邂逅は、長谷観音の靈験であることを印象づけ、玉鬘の新たな物語が展開されると理解することができる。

玉鬘の巻でとりわけ注目されるのが、長谷観音の唐土にまで評判が高いという靈験譚である。永観二年(九八四)成立の『三宝絵』⁽³⁾に「ソノ、チ利益アマネク靈験モロコシニサヘキコヘタリ」(五月長谷菩薩戒)とあるように、唐土にまで靈験が届くという評判は、古くから伝承されていることがわかる。源氏物語の古注釈『原中最秘抄』は、靈験譚の例として、散佚書の『長谷寺流記』(以下、『流記』と略称する)の馬頭夫人^{めづぶにん}の話(以下、馬頭夫人説話とする)を引く。唐の馬頭夫人は馬のような醜貌であるが、長谷観音の靈験により端嚴美麗になるという話である。以降、『河海抄』をはじめ諸所の注釈書に概略が引かれてきた。それはすなわち、長谷寺に唐土や新羅にまで靈験を及ぼすという靈験譚の伝わる中で⁽⁵⁾、この馬頭夫人説話が、玉鬘の物語に相応しい事例の一つであるに他ならない。しかしながら、『原中最秘抄』が『流記』の馬頭夫人説話を引く意図については、論じられないように見受けられる。

本稿は『原中最秘抄』所引の『流記』の馬頭夫人説話は、玉鬘の巻との関わりを示していると想定して考察したい。また、この馬頭夫人説話の原拠とされる金剛醜女説話⁽⁶⁾は、拙稿「源氏物語における末摘花の造型―金剛醜女説話の受容について―」⁽⁷⁾(以下、前稿とする)において末摘花の造型に関わることを述べたが、玉鬘にも末摘花と同様に「玉かつら」と「かたは」という共通する語を用いることから、金剛醜女説話の関わりについても考察を加えることで、玉鬘

造型の背景に迫ってみたい。

一、馬頭夫人説話の伝本について

玉鬘の巻と馬頭夫人説話との関わりについて、具体的な検討に入る前に、その前提として踏まえて置きたいのは、現存する資料のなかで、どの本文を用いるのかという点である。最も古い本文と思われるのが、『流記』の佚文の馬頭夫人説話である。永井義憲氏は、野口博久氏の「散佚書の『流記』は長谷寺の内部の管理記録であつた」とする説を肯定され、さらに散見する『流記』の佚文を收拾した上で、成立年は「延喜十年（九一〇）の、それ以前に『流記』は成立していたと考えられる」という試案を提示された。⁹⁾

この『流記』の馬頭夫人説話を引用するのが、『原中最秘抄』である。『原中最秘抄』は、学祖河内守光行（寛元二年（二二四）歿）、その子親行、親行の弟素叙、親行の子聖覚（俗名義行）、義行の子行阿（俗名知行）の四代五人にわたって書き継がれた源氏物語の注釈書である。現在二系統の伝本が伝わり、広本・略本と通称される。広本の原形は、光行の子親行最晩年の文永九年（一二七二）頃の成立とされるが、行阿の加筆終了が貞治三年（二三六四）九月、さらに後人の整理を経て、広本成立にもう少し時間を要したとある。¹⁰⁾馬頭夫人説話の引用文のあとに「已上行阿勘文」と記されていることから、引用は行阿によるものと考えられる。略本は奥書に明記されるように、耕雲山人（花山院長親）によつて抄出・整理されたものである。田坂憲二氏は、略本は広本の省略本ではなく異本別本というもので、耕雲が略本を纏めるに際して依拠した『原中最秘抄』の原本の内容・構成を基本的に尊重しているため、広本（非耕雲抄出本）の欠を補う資料としての意味があると指摘された。¹¹⁾成立は応永十五年（二四〇八）頃以降である。¹²⁾この広本・略本の冒頭部分を比べると、

①長谷寺流記云。唐信宗皇帝之時千人ノ后ヲモチ給ヘリ。第四ノ后ヲ馬頭夫人ト云ヘリ。文宗皇帝孫玄成太子娘。顔長シテ面馬ニ似タリ。仍馬頭ト名ツク。然トモ心ニ情フカクシテ帝ノ寵愛ニ心ナシ。ソレヲ猜テ自余ノ后妃評定シテ云。馬頭夫人ハ夜ナク御門ニマイリ給ヘルハカリニテ、面貌ヲアサヤカニ見給ハサルニヨリテ御気色無双也。白昼ニ彼貌ヲ觀覽アラハ定テ疎ム御心出キナント云合テ

(広本・一〇〇)

②長谷寺流記云。唐僖宗皇帝千人の后をもち給。其中馬頭夫人と云。顔ながくして馬の面に、たり。然心に情ふかくして帝の寵愛ニ心なし。自餘の夫人これをそねみて此面を分明に見たまはぬによりて寵愛あり、白昼にかたちをみせたてまつらんと相儀して

(略本・三三九)

広本の「信宗皇帝」は歴史上実在のない名前であるが、略本は、唐朝第十八代の「僖宗皇帝」の名に訂正し、『流記』の本文を省略していることがわかる。

同じく『流記』の馬頭夫人説話を利用した資料に、鎌倉中期成立の『長谷寺靈驗記』(内題「長谷寺驗記」、以下は『驗記』と略称する)が現存する。『驗記』の成立について永井義憲氏は、正治二年(一一二〇)より建保七年(一一二八)の間の成立となるが、さらにさかのぼって承元三年(一一二九)以前の成立であろうと推測される。この長谷寺に伝わる『驗記』に、唐土や新羅にまで驗を及ぼすという靈驗譚は五話掲載されており、その第六話が「唐朝ノ馬頭夫人得端正成守護神事」である。前掲の①②と同じ冒頭部分を比較すると、③の傍線部分は、①②にみられない本文である。

③第六陽成天皇御宇ニ大唐国ニ王有キ(三)、僖宗皇帝ト云。千人ノ后有リ。其第四ノ后ヲハ馬頭夫人ト名ク。是文

宗皇帝孫玄成太子ノ御娘也。宿習ニヤ有ケム、顔長クシテ鼻ノ姿頗ル馬ニ似リ。ケレトモ心ニ情ケ深クシテ由シ有ル様ニ云ニ付テ、優ニ思ヒケルニヤ。帝王弔心無ク時メカセ玉テ、サル御カタワ有トハ知食ナカラ、カタヘノ后達ヨリ猶マチカクシテナサレケルヲ、数多ノ御方々一ツ心ニ嫉ミアヒ玉テ、何ニモコノ后ノカタワヲ帝ニ見セ奉テ、御中ヲサケ申サムト巧ミケル程ニ、一人ノ后御計事トシテ帝王ヲ始テ千人ノ后集リテ七日七夜花見ノ宴ヲ始テ昼ル彼ノ夫人ノ顔ヲ見セ奉ムト云合セケレハ、九百余人ノ后皆一同シテ此由ヲ奉聞シケリ。

(験記・三〇)

このように『験記』の本文は、広本にない本文がみられ、後半部には長谷寺の山内が広大な清浄の法地で功德成就の三千世界であること等が増補されている。馬頭夫人の顔は、広本「面貌」「彼ノ貌」(前掲①)と略本「此面」「かたち」(前掲②)に対して、『験記』は「カタワ」と本文の異同がみられる。広本と『験記』の同箇所を見比べると、

④ 医師ニ申テ曰。御貌ハ生得也。治スルニ不可ト申ス。

(広本・一〇一)

⑤ 医師申ケルハ御生レ付ノ御カタハラハ葉ノ及フヘキニ非ス。

(験記・三一)

「御貌」は「御カタハ」となる。これは誤写とみるよりも、『験記』の編者による書き替えが考えられる。特に源氏物語との関わりを考察する上で注意したいことは、馬頭夫人説話の結語に、

⑥ 源氏ノ物語ニ唐シノ后、十種ノ宝物ヲ当寺ニ送ルト書キタルハ、此事ヲ思ハエルナルベシ。実ニ此尊ノ閻浮ノ中ニ箇ハレテ、生付ノ叶難キ願ヲモ満玉事、尊哉。

(験記・三四)

と、「源氏ノ物語」とあることから、源氏物語の影響がみられることである。⁽¹⁴⁾

この他に馬頭夫人説話は、長谷寺藏天正十五年（一五八七）写本『和州長谷寺観音験記』と、承応二年（一六五三）の刊記を有する『長谷寺観音験記』と、承応二年と同じ版木を用いた「承応二年（四年の意）孟春吉日和州長谷寺閨東屋弥作開版」が現存する。これらは先にあげた『験記』の本文と小異はあるがほぼ同文で、後半に馬頭夫人が長谷寺の守護神となった経緯が増補されている。承応四年の版本の結語は、

⑦源氏ノ物語ニ唐シノ后、十種ノ宝物ヲ当寺ニ送ルト書キタルト、此事ヲ思侍ルナルヘシ。誠ニ此尊ノ閨浮ノ中ニ簡ハレ生付ノ御片輪ヲ直サセ給事尊哉。⁽¹⁵⁾

と、『験記』の「生付ノ叶難キ願ヲモ満玉事、尊哉」（前掲⑥）は、「生付ノ御片輪ヲ直サセ給事尊哉」となる。このように源氏物語から凡そ二百年後に編纂された『験記』は、長谷観音の霊験譚の信憑性を高める為に、源氏物語を利した書き替えのあることを認識しておきたい。

したがって、略本は広本と比べると訂正や省略がみられ、『験記』は源氏物語の影響が見られることから、玉鬘の巻と馬頭夫人説話の関わりについて考察する為に用いる本文は、散佚書の『流記』の馬頭夫人説話を引用する『原中最秘抄』の広本が適切と考える。

二、『原中最秘抄』が引く馬頭夫人説話と玉鬘の巻の関わり

『原中最秘抄』は、

源氏物語における玉鬘の造型について

一仏ノ御中ニハツセナン日ノ本ニアラタナルシルシアラハシ給モロコシニモ聞エアナリ

長谷寺和州高市郡二建立元正天皇御時養老七年道明法師造之同供養之事聖武天皇御時天平八年導師行基菩薩水鏡
見之長谷寺流記云―前掲第一節①の本文に続く―

一つ書に玉鬘の巻の本文を引用し、註として『流記』の馬頭夫人説話をあげる。

『河海抄』⁽¹⁵⁾は馬頭夫人説話の概略を載せて、その次に、

又吉備大臣人唐時長谷寺観音住吉明神に起請して野馬台を読みける靈瑞あるよし江談にみえたり。

(河海抄・三八六)

又、吉備真備が唐において野馬台詩の解説を命じられた時、長谷寺に祈ると読むことができたという話が、『江談抄』にみえると紹介する。以下『紹巴抄』(二五六五年成立)、『孟津抄』(一五七五年成立)、『湖月抄』(二六七三年成立)も、馬頭夫人説話と吉備真備の話を紹介することから、唐土にまで評判が高い長谷観音の靈験の一つとして、馬頭夫人説話を紹介するように窺える。しかしながら『原中最秘抄』の筆者が、『流記』の馬頭夫人説話をあげるのは、玉鬘の巻の全体の構成に関わることを認定したのではないだろうか。

まず長谷観音は、馬頭夫人説話と玉鬘巻において主人公開運の欠くことのできない重要な要素であることを確認しておきたい。そして考察の重要な糸口となると思われるのが、馬頭夫人の馬のような醜貌と、玉鬘の「かたは」の噂である。大切に育てた姫君の疵になる噂を、乳母みずから立てるといふ作者の意図に、注意を払う必要があるのだ

はないだろうか。次の1から4は、両話が共通すると思われる箇所である。

1、馬頭夫人の醜貌と玉鬘の「かたは」

馬頭夫人は、「顔長シテ面馬ニ似タリ。仍馬頭ト名ツク。」(前掲第一節①)と馬のような長い顔のために、馬頭夫人と呼ばれる。第一節の④⑤で考察したように、馬頭夫人の「御貌」(広本)が「御カタハ」にかわる例や、末摘花の巻の主人公は、「あなかたはと見ゆるものは御鼻なりけり。ふと目ぞとまる。普賢菩薩の乗物とおぼゆ」(末摘花・二七〇)とあるように、極端に見苦しい様子は、「かたは」という認識のあったことがわかる。

玉鬘は「いとうつくしう、ただ今から気高きよらなる御さま」(玉鬘・二八三)と、気品のある美しい姫君であるが、評判を聞いた田舎人からの求婚を固辞する方便として、乳母がはなはだしい不具があると言いふらすことから、「故少貳の孫は、かたはなむあんなる。あたらしものを」(玉鬘・二八六)と噂が立つ。ところが大夫監は「いみじきかたはありとも、我は見隠して持たらむ」(玉鬘・二八七)と、玉鬘との結婚話を強引に進めてくるのである。このような展開は、玉鬘と乳母一家の追い詰められた状況を際立たせるといえるが、大切な姫君をわざわざ「かたは」と貶める必然性はないといえよう。しかし、作者が玉鬘に「かたは」を用いることで、馬頭夫人の極端な醜貌と同じく、どちらも「かたは」の要素が共通するといえるのである。

2、長谷観音に祈請する

馬頭夫人は馬のような面貌を嘆いて医師を召すが、生まれつきは治すことができないといわれ、次に仙人を召すと、

我昔、宝志和尚ト云シ時、他心智ヲ得、飛行自在ナリキ。其時世界ヲカケリ見シニ、大日本国長谷寺観音ハ極位ノ大薩埵也。次ニ凡衆ニ同シテ利生ヲホトコシ給。彼国ハ是ヨリ東方ナリ。タトヒ行程ヲ隔ツト云トモ、彼仏ヲ向奉祈請マシマサハ、定感応タチ処ニ侍ナント申ニ、仍骨髄ヲクタクキ礼拝ヲイタシ数反名ヲ唱エテイノリ給ニ、

— 3 に続く —

(広本・一〇二)

仙人は昔「宝志和尚⁽¹⁶⁾」であつた時に世界を見た中で、東方にある大日本の長谷寺の観音は極位の大菩薩で、すべての衆生に利生を施すと教える。「行程ヲ隔ツト云トモ、彼仏ヲ向奉祈請マシマサハ定感応タチ処ニ侍ナント申ニ」は、たとえ道のりが遠くても、長谷観音に祈れば必ず加護を施してくださるといふ意味である。乳母子豊後の介は、

「—前略— ましてわが国のうちにこそ、遠き国の境とても、年経たまひつれば、若君をばまして恵みたまひてむ」とて出だしたてまつる。

(玉鬘・二九七)

ましてや姫君は、同じ日本の国の中に、遠い筑紫の国とはいつても、長年お住まいになつたのだから姫君をお助け下さるに違いないと、玉鬘を初瀬に向かわせるのである。「タトヒ行程ヲ隔ツト云トモ」と「遠き国の境とても」は、長谷観音と遠く離れていてもという意味が一致し、馬頭夫人と玉鬘は、人に勧められて、唐土にまで評判の長谷観音の加護を請うことが共通する。

3、長谷観音の利益をもたらす老僧と右近との邂逅

馬頭夫人が長谷観音の方向に向かって祈ると、

七日ヲフル暁夢ニウツ、トモナク、東方ヨリアヤシキ老僧、香ノ袈裟ヲ着タルカ紫雲ニ乗テ、手ニ水瓶ヲ持来近付テ顔ニソ、クト思ニ、心歎喜シテ已ニ利生ニ預ヌト思フ。

(広本・一〇三)

七日目の暁の夢に、不思議な老僧が紫雲に乗って現れる。玉鬘は、都から出発して四日目に椿市の宿において、玉鬘の行方を捜していた亡き夕顔の乳母子右近と邂逅する。

皆おどろきて、「夢の心地もするかな。いとつらく、言はむかたなく思ひきこゆる人に、対面しぬべきことよ」とて、この隔てに寄り来たり。

(玉鬘・三〇一)

目の前に現れた右近を、夢を見ているような心地と驚く。老僧は夢の中に、右近は現実に見れると状況は違うが、主人公に利益をもたらす人物が夢のように現れることが一致する。

4、馬頭夫人と玉鬘の変貌

馬頭夫人のもとに、不思議な老僧が現れ、御貌に水瓶の香水を注ぐと、

心歎喜シテ已ニ利生ニ預ヌト思フ。則鏡ヲ取テ形ヲ見レハ、本ノ容兒ニアラス。端嚴美麗ニナレリ。

(広本・一〇三)

馬頭夫人の心は歎喜し、観音の利益を預かっただけで、すぐに鏡を取って見れば、容貌は端嚴美麗になり、そして皇帝の寵愛がより一層に増すという大団円である。

玉鬘は生まれついた美女で、馬頭夫人のように容貌が変わることはない。しかし、源氏物語の中で、玉鬘ほど劇的な環境の変化に翻弄された姫君は他にみられない。高貴な血筋に生まれながら幼き時に乳母と共に筑紫に下り、成人した後に帰京が果たせたとはいっても、九条あたりの市女商人の住む場所での心細い暮らしを余儀なく強いられるのである。六条院に引き取る際に源氏が、「さやうに沈みて生い出でたらむ人のありさまうしろめたくて」(玉鬘・三二五)と心配するように、落ちぶれた境遇で育った姫君である。その姫君が右近によって見いだされて、源氏に知らされると、格別な装束を整え、お付きの女房とともに御車を三台して、源氏の娘として六条院に迎えられるのである。これはまさしく長谷観音の靈験により、薄幸の姫君が端嚴美麗に変貌したといえるであろう。

このように馬頭夫人説話と玉鬘の巻は、長谷観音の利益により開運するだけでなく、1馬頭夫人の醜貌と玉鬘の「かたは」の要素、2長谷観音に祈請する、3長谷観音の利益をもたらす人物との邂逅、4馬頭夫人と玉鬘の変貌の共通点がみられる。そして、広本だけにみられる本文の「行程ヲ隔ツト云トモ」(前掲)と、「夢ニウツ、トモナク」(前掲3)と類似する表現が、源氏物語に見られることから、玉鬘の巻に馬頭夫人説話の要素を用いたことが考えられるのである。

三、金剛醜女説話と玉鬘の造型について

前節では、玉鬘の巻に馬頭夫人説話の要素が見られることをのべた。しかしながら玉鬘の巻は、馬頭夫人説話の引用だけでは捉えきれない部分がみられる。馬頭夫人説話の主人公と、原拠とされる金剛醜女説話の主人公は、生まれついた醜女で、外面は動物に喩えられるが、内面は心ばえがよく、仏によって美しく変貌することが共通する。この金剛醜女説話については、前稿において末摘花の造型をめぐる発想や表現に関わることを考察したが、玉鬘の造型にも末摘花と同じ要素がみられる。その一つが「玉かつら」の語である。源氏物語のなかで「玉かつら」を用いるのは、末摘花と玉鬘の二人だけに限られている。これらのことから、本節では、玉鬘の巻と金剛醜女説話との関わりを考察をすることで、玉鬘の造型について馬頭夫人説話の引用だけでは捉えきれない部分について追究したい。

まず、金剛醜女説話の概略について述べておきたい。波斯匿王の娘波闍羅⁽¹⁷⁾（金剛）は、前世において一人の聖人を供養した故で王家に生まれるが、聖者を供養しながら、心中に聖者の醜さを蔑んだ罪により、醜く生まれつく。娘は、我が身の罪咎を責めて仏を念じると、仏はすぐに女の前に現れ、娘は仏相を移し得て天女のように美しくなり、前世の罪を懺悔することにより、世々富貴、解脱を得るといふ話である。

金剛醜女説話の原拠は訳出年代順に、①賢愚因縁経卷第二「波斯匿王女金剛品第八」⁽¹⁸⁾（以下、賢愚経）、②撰集百縁経卷第八「波斯匿王醜女縁」⁽¹⁹⁾（以下、百縁経）、③雜宝蔵経卷第二「波斯匿王女醜女頼提縁」、④経律異相卷第三十四諸国王女部「波斯匿王女金剛形醜以念」⁽²⁰⁾「立改」⁽²¹⁾「殊顔」⁽²²⁾、⑤法苑珠林卷第七十六、十惡篇「第八十四之四惡口部」などがある。この①から⑤の相違点について概観しておきたい。

賢愚経と百縁経は概ね同文であるが、百縁経には次のような省略や異訳が見られる。

①名曰^ハ摩利^ト、時生^ニ一^ム女^ヲ、字波闍羅^ハ晋^ニ金剛^ト。其女面類^ニ、極^テ為^ス醜^ス惡^ト。肌^ニ体^ハ鹿^ノ洪^ト、猶^ク如^ク駝^ノ皮^ト。頭^ハ髮^ハ鹿^ノ強^ト、猶^ク如^ク馬^ノ尾^ト。
(賢愚經・三五七)

②摩利夫人^ニ一^ム女^ヲ兒^ヲ。面^ニ貌^ハ極^テ醜^シ、身^ニ体^ハ鹿^ノ洪^ト、猶^ク如^ク蛇^ノ皮^ト。頭^ハ髮^ハ鹿^ノ強^ト、猶^ク如^ク馬^ノ尾^ト。
(百緣經・二四二)

①賢愚經の金剛醜女の肌は「駝皮」とあるが、②百緣経では「蛇皮」となる。この漢訳の違いにより、百緣経を原拠とする日本の金剛醜女説話は、「身^ニ膚^ハ如^ク毒^ノ蛇^ト」⁽¹⁾。其臭^ハ香^シ不^レ可^ク近^ク」⁽²⁾（注好撰・六十）と身の肌を蛇皮に喩えるようになったと考えられる。③雜宝藏経は、金剛の代わりに「頼提」という名がみられ、「有^ニ十八^ノ醜^ト」⁽³⁾（雜宝藏経・四五七）と十八の醜さが有り、肌が魚皮のようで、夫が仲間から重い罰を受けるなど、他の仏典と異なる内容が加わる。④経律異相は、賢愚経の概ね半分に抜粋した内容である。⑤法苑珠林は百緣経を引くと有り、百緣経を半分にした本文の省略と書き替えが見られるが、百緣経にはない「金剛」の名前が見られる。

これらの中で、①賢愚経は、大聖武とよばれる伝聖武天皇宸筆「東大寺本賢愚経残卷」（波斯匿王女金剛品第八）が現存し、国宝に指定される。また永観二年（九八三）成立の仏教説話集『三三三』の序に、賢愚経卷第四「出家功德戸利苾提品第二十二」の舍衛城の薩薄の婦は、我が貌の良いことを誇り、死後に虫となり己の屍に住む話を掲載する。『三三三』下には、「又賢愚経に多くを聞けば」、「賢愚経に、仏五施をほめ給ふ」と賢愚経が引かれる。室町前期の『河海抄』に、鈴虫巻の「行香の人々」（鈴虫・三四六）の註に、「行香事 見賢愚経云々」と賢愚経を示していることから、広く知られた仏典であることがわかる。これらのことから、訳出年代が最も古く、本文の内容が最も豊かな①賢愚経と、玉鬘の巻との関わりを考察したい。

1、主人公の出自

金剛醜女は「爾時、波斯匿王最大夫人、名曰「摩利」。時生一女子」（賢愚経・三五七）とあるように、波斯匿王と摩利夫人の娘である。玉鬘は「父大臣の筋さへ加はればにや、品高くうつくしげなり」（玉鬘・二八五）と、父方の血筋の高さが共通する。

2、外の人に見せずに守護されて育つ

便勅^{チヌ}宮内^ニ。勲^ニ意^ニ守護^シ、勿^レ令^ム外人^ニ得^ル見^ラ之^也。所以^カ者何、此女^ノ雖^モ醜形^不似^レ人^ニ、然^{トモ}是末利夫人^ノ所^レ生^ム。此^レ雖^モ醜惡^ト、当^ニ密遣^レ人^ヲ而護^シ養^フ之^一。

（賢愚経・三五七）

金剛醜女は人離れをした醜形の為に、「外人」に見せないように密かに護養される。「護養」の「護」は保護の意味で、「養」は育てるの意味である。玉鬘の場合も、

その人の御子とは、館^ノの人^{にも}知らせず、ただ孫^ノのかしづくべきゆゑあるとぞ言ひななければ、人^{に見せず}、限りなくかしづくききこゆるほどに、

（玉鬘・二八五）

と育てられる。「館の人」と「人に見せず」の「人」は、賢愚経の「外人」に対応する。両女は、人に見せずに、大切に養い育てられることが共通する。

3、両親と別れて適齢期をむかえる

金剛醜女は「此雖醜惡、当密遣人而護養之」（前掲②）と醜惡であるけれども、密かに人を遣わし養護される。「人を遣わし」は、父王が人を派遣する意味で、金剛醜女は親から離れて養護されると捉えることができる。玉鬘も乳母と共に筑紫に赴くことから、親と別れて乳母に育てられることが共通する。また金剛醜女と玉鬘は、親と別れた後に「女年転大、任当嫁処」（賢愚経・三五七）と「この君、ねびととのひたまふままに」（玉鬘・二八五）と、結婚の適齢期を迎えることが共通する。

4、金剛醜女の醜貌と、玉鬘の「かたは」

第二節で考察したように、末摘花は「あなかたはと見ゆるものは御鼻なりけり」（前掲第二節①）とあり、極端な醜貌は不具という認識から、金剛醜女の「此女雖醜形不似人」（前掲本節②）という人離れした醜貌も「かたは」といえる。玉鬘は生まれついた美女であるが、求婚を固辞する方便に乳母が「容貌などはさてもありぬべけれど、いみじきかたはのあれば」（前掲第二節①）と言いふらすことから、事実ではないけれども不具の要素をもつことが共通するといえる。

5、前世の罪の自覚と、仏を念す

馬頭夫人説話は、前世の罪を嘆く要素はないが、金剛醜女は「彼女心悩、自責罪咎。而作是言。我種何罪、為夫所憎、恒見幽閉」（賢愚経・三五七）と心悩み、自らの罪咎を責めてこのように言う。そして「心遙礼世尊、唯、願垂愍」（賢愚経・三五七）と、仏に救いを願うのである。この罪咎が前世の行いによるものであることは、波斯

匿王が、

時波斯匿王、跪白、「仏言、不審、此女宿殖何福、乃生豪貴富樂之家。復造何咎。受醜陋形、皮毛麁強、劇如畜生。」

(賢愚經・三五八)

娘は前世において、どのような福をうえ、豪貴富樂の家に生まれることができたのか、また何の咎を造り醜陋を受け畜生のものであるのかと、仏に娘の因縁を聞く言葉から解る。

玉鬘は、長谷寺に徒歩で向かう辛い道中に、

いかなる罪深き身にて、かかる世にさすらふらむ、わが親、世になくなりたまへりとも、われをあはれとおぼさば、おはすらむ所に誘ひたまへ、もし世におはせば、御顔見せたまへと、「仏を念じつつ、ありけむさまをだにおぼえねば、ただ、親おはせましかばとばかりの悲しさを嘆きわたりたまへるに、」

(玉鬘・二九七)

と、自らの前世の罪を責めながら仏を念じる。金剛醜女の「我種何罪」と玉鬘の「いかなる罪深き身」は、前世にどのような罪を犯したのかと問うことが共通し、現世の境遇を嘆いて仏を念じることが一致する。

6、金剛醜女の変貌と玉鬘のすぐれた容姿

金剛醜女は、仏の利益で美しく変貌すると、「王見婦端政殊少双」(賢愚經・三五八)と婦人の姿が立派なこ

とは、とりわけて優れて並ぶものが少ないとある。玉鬘の姿をみた右近は、

見^ミたてまつるに、命のぶる御ありさまどもを、またさるたくひおはしましなむやとなむ思ひはべるに、いづくに
か劣^セりたまはむ。ものは限りあるものなれば、すぐれたまへりとて、頂^{タカ}きを離れたる光やおはする。

(玉鬘・三〇六)

と、命が延びる源氏や紫の上のお二人の美しい様子を、他に並ぶものはないだろうと思っていたが、玉鬘の美しさは劣っていない、仏の頭を離れるような光はないけれども、この上ない誉めようである。「双ならツメ」と「たぐひ」は、「相ならぶもの」という意味で、金剛醜女が仏の利益で変貌したあとの、特別にすぐれ並ぶものが少ないという美しさの表現が一致する。

7、父親に立派な車で迎えられる

父王は、娘の金剛醜女が美しく変貌したことを聞くと、

審^ニ如^ク是^ノ者^ニ、速^ニ往^テ将^ヒ来^レ、即^ニ時^ニ嚴^ニ車^ヲ、迎^ヘレ女^ヲ入^ル宮^ニ。

(賢愚経・三五八)

「審つまびらかにそうならば、すぐに往き、引き連れて来よ」と、娘が端嚴美麗に変貌したことを詳しく聞くと、ただちに立派な嚴車にて娘を、宮殿に迎え入れるのである。源氏も、「容貌などは、かの昔の夕顔と劣らじや」(玉鬘・三二三)

と、玉鬘の容貌について確認をする。右近から「こよなうこそ生ひまさりて見えたまひしか」（玉鬘・三二三）と母夕顔よりも格段に美しく成人したことを聞くと、「さらばかの人、このわたりにわたいたてまつらむ」（玉鬘・三二四）と自分の娘として引き取るのである。六条院に入るときは、「御車三つばかりして、人の姿どもなど、右近あれば、田舎びずしたてたり」（玉鬘・三二〇）と、御車を三台したて、右近がついて田舎びることのないよう、格別な装束をはじめ、お供の女房を選んで、立派に整えて六条院に入るのである。金剛醜女の父王と、玉鬘の養父の源氏は、娘の容貌の美しいことを確認すると、立派な車をしたてて娘を自分の住む宮殿に迎え入れることが共通する。

以上の考察の1・2・3・5・7の共通点は、馬頭夫人説話にみられない要素である。このように馬頭夫人説話の原拠である賢愚経の金剛醜女の要素が、玉鬘の物語に組み込まれていることがわかる。

おわりに

こうした考察から、玉鬘の造型をめぐる発想や表現に、馬頭夫人説話とその原拠の金剛醜女説話の構成や要素を用いたことがわかる。その場合の典拠となった資料を推察すると、

1 馬頭夫人説話、2 賢愚経、3 賢愚経を原拠とする金剛醜女説話があげられる。

日本に現存する金剛醜女説話は管見によると、制作年代順に①注好撰「金剛醜女変美艶第二十九」、②今昔物語集巻第三「波斯匿王娘金剛醜女語第十四」⁽²⁵⁾、③宝物集⁽²⁶⁾、④私聚百因縁集巻第三十四「金剛醜女事」⁽²⁷⁾、⑤岡崎満性寺本聖徳太子内因曼荼羅⁽²⁸⁾、⑥神道集巻第四第十八「諏訪大明神五月会事」⁽²⁹⁾、⑦説法統因縁集光明部一七「醜形作端正」⁽³⁰⁾がある。また四天王寺蔵「聖徳太子絵伝」⁽³¹⁾「金剛女王」の絵解き絵が現存することから、日本においても金剛醜女説話は絵説きの題材として、また仏教説話として広く流布していたことがわかる。これらの説話を比較した結果、①②④⑤は小異

はあるが、ほぼ同文で、百縁経もしくは百縁経をひく法苑珠林の系統といえる。③⑤は金剛醜女と勝鬘夫人が同一人物で、金剛醜女は仏の慈悲により勝鬘夫人となる。⑥は「波斯匿王の娘金剛女の宮は天下第一の美人であったが十七歳になったとき体が急に金色に替わり、生きながら鬼王になる」と異なる本文が加わる。⁽²⁸⁾③⑦は醜女の「金剛」の名がみられない。このように日本に現存する金剛醜女説話のなかで、賢愚経を原拠とする内容の豊かな金剛醜女説話を見いだすことはできないが、源氏物語の時代にあつたと想定すれば、玉鬘の巻は、1『流記』の馬頭夫人説話と、3賢愚経を原拠とする金剛醜女説話の資料を用いた可能性が考えられる。

以上の考察から『原中最秘抄』が、一つ書きに玉鬘の巻の「仏ノ御中ニハツセナン日ノ本ニアラタナルシルシアラハシ給モロコシニモ聞エアナリ」の本文を引用し、その註として『流記』の馬頭夫人説話の本文を掲載するのは、玉鬘の巻における馬頭夫人説話との関わりを示す重要な指摘といえる。また第一節で考察したように、現存する馬頭夫人説話の中で、『験記』の本文は源氏物語の影響による書き替えがみられ、また『略本』の本文は、『広本』の大幅な省略が見られることから、『原中最秘抄』が引く馬頭夫人説話は、散佚書の『流記』の馬頭夫人説話の本文を知る上において、貴重な資料といえるのである。

注

- (1) 『梁塵秘抄』の三二三番歌は、新聞進一・外村南都子両氏校註『完訳日本の古典梁塵秘抄』（小学館、昭和六十三年）による。
- (2) 源氏物語の本文は、石田穰二・清水好子両氏校註『新潮日本古典集成 源氏物語』（新潮社、平成十二年）により、その巻名と頁数を記す。一部表記をあらためたところがある。

- (3) 本文は、馬淵和夫・小泉弘・今野達三氏校註『新日本古典文学大系31 三宝絵注好撰』（岩波書店、平成九年）による。
- (4) 馬頭夫人（めづぶにん）の振り仮名は、京都女子大学蔵『長谷寺観音験記』（題箋『長谷寺観世音靈験記』和州長谷住関東屋弥作開板、承応四年）による。本文の引用は、その丁数を記す。
- (5) 永井義憲氏解説『長谷寺験記』（新典社善本叢書2、平成四年）に「古備大臣於大唐読野馬台帰朝事第一」・「唐朝馬頭夫人得端正成守護神事第六」・「唐大梁大祖取国位達立今長谷寺事第九」・「新羅国照明王后遁王難送宝物事第十二」・「唐堯惠禅师依冥告来当寺往生事第十三」の五話が見られる。
- (6) 池上洵一氏「長谷寺対外靈験譚の構造―長谷寺「唐朝馬頭夫人」説話と勝尾寺「百済国王后」説話―」（『国文論叢』36号、特集長谷寺研究、神戸大学文学部国語国文学会、平成十八年七月）は、「馬頭夫人の話が直接的に踏まえた典拠が何であったかは決定し難いが、金剛醜女の話の型を踏まえて成り立っていることに疑問の余地はない」と指摘される。
- (7) 拙稿「源氏物語における末摘花の造型―金剛醜女説話の受容について―」（『和漢比較文学』第五十二号、平成二十六年二月）。
- (8) 野口博久氏『長谷寺験記』と『流記』（西尾光一教授定年記念論集『論纂説話と説話文学』笠間叢書125、昭和五十四年所収）。
- (9) 永井義憲氏「長谷寺流記と縁起・験記」（『大妻国文』第22号、平成三年三月）。
- (10) 『原中最秘抄』の成立については、『国立歴史民俗博物館蔵貴重典籍叢書』（文学篇第十九卷、臨川書店、平成十二年）の解題著者、館蔵史料編集会代表虎尾俊哉氏による。広本の本文は同書により、頁数を記す。旧字体は便宜上通行に改め、適宜句読点を入れる。
- (11) 田坂憲二氏『原中最秘抄』の完本と略本」（『文芸と思想』51、昭和六十二年二月）。
- (12) 略本の成立年については、阿部秋生氏「原中最秘抄」の解説（蓬左文庫本『奥入原中最秘抄』日本古典文学影印叢刊19、貴重本刊行会、昭和六十年）による。略本の本文は、同書によりその頁数を記す。旧字体は便宜上通行に改め、適宜句読点を入れる。
- (13) 『長谷寺験記』の本文は、前掲註（5）に同じ。同書の長谷寺蔵古写本『長谷寺靈験記』（内題『長谷寺験記』）により、振り仮名と句読点は適宜入れ、その頁数をいれる。

- (14) 池上洵一氏の前掲註(6)に同じは、「実は、唐の后が十種の宝物を送ったことなど、『源氏』のどこにも書かれていない。中略―『験記』はさりげなく言葉を補って、『源氏』を話の信憑性保証のために機能させている」と指摘される。
- (15) 本文は玉上琢彌編、山本利達・石田穂二両氏校訂『紫明抄・河海抄』(角川書店、昭和四十三年)による。
- (16) 毛利久氏「宝誌和尚像」(『古文化』第一集、昭和二十三年十月)は、「宝志和尚は中国六朝時代の実在の僧で、野馬台詩の作者としても我が国人に可成り知られてゐた」と紹介し、宝志和尚が観音の変化の身と信じられていたとされる。
- (17) 岩本裕氏「縁起の文学」(『東方学』第三十輯、昭和四十年七月)は、賢愚経の題名に見られる波斯匿王の王女金剛の名は、波蘭羅の訳でサンスクリット語で *vajra* と指摘される。
- (18) 金岡照光氏『敦煌の絵物語』(東方書店、昭和五十六年、一六八頁)は、賢愚経について「賢愚経が凡本訳出の経典ではなく河西の僧曇学等八人の僧が于闐へ赴き、般遮于悉会で説教を聞き、その胡語を記録して帰り、高昌において漢語でこれを記して、元嘉二十二年(四四五)一書を為したという『出三蔵記集』巻第二、及び僧祐撰『賢愚経記』(『出三蔵記集』第九)を真実とすれば、『賢愚経』自体、河西に流布する必然性を持っていたものと考えられる」と述べる。
- 賢愚経の本文は『大正新脩大藏経』(大正新脩大藏経刊行会、昭和三十六年)により、その頁数を記す。訓読は『国訳一切経』(大東出版社、昭和四十九年)を参考にし適宜改めた。合わせて東洋仏典研究会監修『高麗大藏経』(東洋出版社、昭和四十六年)と、『東大寺本賢愚経残巻』(大聖武)「波斯匿王女金剛品第八」(『聖武天皇宸翰賢愚経』清雅堂、昭和十八年)を参照する。この他に賢愚経の古写経の興聖寺本は、国際仏教大学院古写本研究所のご厚意により、影印の本文を確認する。石山寺一切経の賢愚経(永暦二年頃写)の本文は、奈良文化財研究所蔵の写真帳により確認をする。
- (19) 出本充代氏『撰集百縁経』の訳出年代について(『パーリー学仏教文化学』八、平成七年五月)は、『百縁経』は呉の時代に支謙(233-253A.D.)が訳したとなっているが、『賢愚経』が先にあり『百縁経』が文章を借用した形跡がある。『百縁経』は、『賢愚経』よりも後に訳出されたもので、訳出年代は五世紀中期以降」と指摘される。百縁経の本文は『大正新脩大藏経』による。
- (20) 大正新脩大藏経の校註「貌」、高麗大藏経「類」、東大寺本『賢愚経』残巻(大聖武)は「狼」、石山寺本「狼」、興聖寺本「狼」

とあるが、「狼」は「貌」の異体字である。「類」は、かたち・形象・姿・様子のこと「貌」と同じ意味である。

(21) 東大寺本『賢愚経』残卷（大聖武）は「馳」、高麗大蔵経は「馳」、石山寺本「馳」、興聖寺本「馳」とあるが、「馳」「馳」「馳」は、「駝」の異体字である。

(22) 注好撰の本文は、原姿を伝える最善本と見られる後藤昭雄氏編金剛寺蔵『注好撰』（和泉書院、昭和六十三年）によりその頁数を記す。併せて仁平二年（一一五二）の奥書を有する東寺観智院本『注好選』（新日本古典文学大系、平成九年）を参照し、引用の際に訓点は私に改めた。

(23) 賢愚経巻第二「華天因縁品第十」と賢愚経巻第四「摩訶斯那優婆夷品第二十一」を引く。

(24) 賢愚経巻第三「七瓶金施品第一八」に「時に衆僧食時已に到り作業して立つ。蛇、彼の人を次第に香を付せしむ。自ら信心を以て香を受くる者を視る」とあり、僧に香を配らせるが本縁である（『望月仏教大辞典』、世界聖典刊行協会、昭和四十八年）。

(25) 今野達氏「今昔物語解説」（新日本古典文学大系『今昔物語集』、平成十一年）は、「一一二〇年が成立の上限で、一応この頃を目安として成立年次を推定すべきであろう」とされる。

(26) 山田昭全氏「宝物集解説」（新日本古典文学大系『宝物集 閑居友比良山古人霊託』平成五年）は、成立年について「史実に合わせるとすれば、治承二年（一一七八）とするのがよい」とある。

(27) 「私聚百因縁集」巻第三「十四」「金剛醜女ノ事。釈尊ノ利生見仏ノ功德。」（『大日本佛教全書』有精堂出版部、昭和七年）参照。

(28) 平松合三氏「聖徳太子内因曼荼羅と親鸞聖人伝」（『高田学報』第四十八輯、昭和三十六年八月）は、「正中二年（一三三五）の書写年記と解する」とされる。本文は黒田彰氏所有の満性寺『聖徳太子内因曼荼羅』の複写と平松合三氏『真宗史料集成』（第四巻、同明舎出版、昭和五十七年）を参照した。この他に黒田彰氏より、四天王寺本『太子伝』、叡山文庫本『太子伝』一、内閣文庫本『聖徳太子伝記』一、鶴林寺本『太子伝』一、等に金剛醜女と勝鬘夫人を同一視した内容があることを御教示頂く。

(29) 『神道集』巻第四十八「諏訪大明神五月会事」に波斯匿王の娘金剛女の宮の話がある。貴志正造氏は神道集の成立年について「後光厳院の文和・延文年間（一一三三―一一三五）の成立と考えられる」とされる（『神道集』、「解説」、平凡社、昭和四十二

年)。

- (30) 京都女子大学蔵版本『説法続因縁集』十七「醜形作端正」(江戸期頃)は「百縁経ノ説」とある。
- (31) 重要文化財「聖徳太子絵伝」は、もともとから四天王寺にあったものではなく伝来は未詳で、作は鎌倉後期とされる。作品の概要と図様構成については、村松加奈子氏「四天王寺所蔵二幅本聖徳太子絵伝」(『国華』第一四〇八号、平成二十六年)に詳しい。
- (32) 福田章氏『神道集説話の成立』(三弥井書店、昭和五十九年)参照。

【附記】 本稿は「第百二十九回 和漢比較文学学会例会(西部)」平成二十七年十一月二十八日、於京都光華女子大学)での発表資料をまとめたものである。御指導を賜りました先生方に心より深謝申し上げます。

(本学大学院特別研修者)